



(公財) 国際宗教研究所 宗教情報リサーチセンター

「ラク便利」 小特集

→他の論文・研究ノート・小特集のバックナンバーは[こちら](#)をご覧ください。

*印刷してご利用の際は2頁目以降を印刷して下さい。

小特集 **比叡山宗教サミットから20年**

比叡山宗教サミット20周年を記念して、「世界宗教者平和の祈りの集い」(以下、「平和の祈り」)が、8月3日に京都国際会館(京都市)で、8月4日には天台宗総本山の比叡山延暦寺(滋賀県大津市)で開催された。本項では、一般紙に見られる「平和の祈り」の報道について見てみよう。なお宗教専門紙で報じられた「平和の祈り」は、ラク便り本号の「宗教専門紙の記事から」を参照されたい。

比叡山宗教サミットは、第253代天台座主であった故山田恵諦氏の提唱によって、1987年8月3日と4日に開催された行事であった。同サミット以降、翌年1988年から毎年8月に比叡山で、天台宗などの主催による「世界平和祈りの集い」が実施されてきたが、今年は20年を迎える節目の年であった。

今回の「平和の祈り」は、「和解と協力」をテーマに、日本宗教代表者会議の主催で開催された。同会議は2007年2月16日に結成され、日本宗教連盟協賛の5団体(教派神道連合会、全日本仏教会、日本キリスト教連合会、神社本庁、新日本宗教団体連合会)、および世界宗教者平和会議日本委員会、世界連邦日本宗教委員会などで構成された。

「平和の祈り」は、全国紙や地方紙では、どのように報道されたのであろうか。まず京都市内のホテルで6月21日に記者会見が行われ、主催者である日本宗教代表者会議の名誉議長である半田孝淳天台座主、同会議名誉顧問の白柳誠一カトリック枢機卿と出口紅大本教主が会見に

臨み、「平和の祈り」の意義を強調した(産経・京都6/22、京都・京都 6/22)。開催の直前には、各紙で半田氏がインタビューを受けている。平和運動に関わる理由として、原水爆禁止運動に力を注いだ父の故半田孝海氏のことなどを語っていた(毎日・大阪 7/18朝日・大阪 7/28、読売・大阪・夕 7/31)。開催前日の8月2日には、国立京都国際会館で「平和の祈り」の関連行事として、内戦があったボスニア・ヘルツェゴビナから来日した女兒4名が、広島の子供たちと共に平和への祈りを込めて折鶴を作った(京都・京都 8/3)。

そして8月3日に「平和の祈り」は開幕した。初日は国立京都国際会館で、記念講演とシンポジウムが実施され、世界19カ国から25人の宗教代表者を含む約2000人が参加した。シンポジウムの最後には、アフガニスタンの旧タリバン政権による韓国人ボランティア拉致・殺害事件の早期解決を願う緊急声明を発表し、参加者の賛同を得た。同声明は英訳され、アフガニスタンと韓国両政府、各国の諸宗教の協議会に送られるという(京都・京都 8/4)。8月4日には、比叡山山上で「世界平和祈り式典」が開かれ、各宗教の指導者と一般市民が、世界平和とアフガニスタンの韓国人拉致事件の解決を祈った(東京・東京 8/5)。

「平和の祈り」をめぐる一般紙の報道では、2種類の取り上げ方があった。すなわち事実関係のみを報道する記事、または参加者の発言を紹介して「平和の祈り」の意義を鋭く問いた記事である。とくに後者は、各紙の宗教関係の欄で取り上げられていた。例えば、京都新聞の「こころのページ」では、発展途上国からの参加者の声として「紛争の原因は宗教対立よりも経済や政治」との意見や「貧富の差の解消」を急ぐ声を紹介している(京都・京都 8/25)。朝日新聞の「こころ」の欄は、より踏み込んだ論調で、「紛争や暴力の絶えない現状に、単に祈りを共にし、対話するだけにとどまらず、現実の問題へ宗教者が踏み出さねば、との危機感がにじんだ大会であった」と評している(朝日・大阪・夕 8/17)。

「平和の祈り」は、「世界」の字句を冠しているが、ならば海外へ向けてどのように報じられているだろうか。宗教情報リサーチセンターの宗教記事データベースでは、英字紙は3紙(THE JAPAN TIMES、ヘラルド朝日、THE DAILY YOMIURI)を収集している。同データベースを確認したところ、開催地の地名である“Hiei”ならびに“summit”などを検索したが、「平和の祈り」に類する記事は確認できなかった。また「平和の祈り」のホームページを見ると、表示言語は日本語のみで、外国語のページの有無は確認できなかった。同ページには、「比叡山宗教サミット20周年記念」と「世界宗教者平和の祈りの集い」の英訳が付記されているが、英語による説明はなかった。

<http://www.tendai.or.jp/summit/index.html>

以上のように新聞報道などを見る限りでは、世界の諸宗教者を集めた「平和の祈り」ではあったが、英字新聞でも取り上げられていないことを鑑みると、きわめて局地的な行事になっていたといえよう。またホームページを作成していたとはいえ、外国語の発信がなされていないなど、世界へ情報を発信するインターネットの特性を十分には生かしていなかった。1987年の比叡山宗教サミット以降、毎年継続して諸宗教者の対話と祈りを開催してきたことは評価できるが、「世界」と称している以上、今後はインターネットによる外国語での積極的な発信が望まれ、一般市民や宗教に感心のない人々も巻き込んでいく必要がある。

なお本欄で参照したURLは、2007年11月8日現在で確認したものである。

[文責:大澤広嗣]